

第28回OMS戯曲賞選考経過 —2021年12月7日—

吉永美和子

2020年1月15日に、国内感染第一号の患者が確認されて以来、私たちの社会生活に否応なく大きな変化をもたらした新型コロナウイルス(COVID-19)。2021年で28年目を迎えたOMS戯曲賞も、その例外ではない。今回の応募対象となる「2020年1月～12月」は、特に4・5月の第一回緊急事態宣言期間中に、数多くの公演が中止および延期を余儀なくされた。OMS戯曲賞は、創設以来「期間中に実際に上演された戯曲」のみを対象としていたが、この状況を考慮して、今回初めて応募規約に「未上演の戯曲も可」という一文が加わったのだ。

蓋を開けてみると、今回の応募作45作品中、17本が2020年末の時点で未上演(2021年以降に、上演が実現した作品が数本あったのは幸いだ)。時勢を反映して、ZOOMを利用したオンライン上演作品も二本含まれていた。

今回最終候補に選ばれた七人の作家たちは、50代のベテランから20代の新人まで、かなり振り幅の広いラインアップ。そして七作品中三本が未上演だ。12月7日12時40分に、最終選考会が始まった時には、まさにこの三本が台風の日になるとは、誰も予想していなかっただろう。

五人の選考委員による最初の投票の結果は、左の表の通り。ざっくりした基準を上げると、◎が強く大賞に推す作品、○が大賞にふさわしいと思われる作品、△が気になる作品という所だ。

	富	豊	田	古	日
イトウ	△	○		△	
久野		○	△	△	
〈秘作〉	△	○	○	△	
高橋	○	△	○	○	○
田村		△		○	
山村	△	△		△	○
山本	○	△	○	○	○

◎が付いた作品はなかったものの、高橋恵と山本彩には、全選考委員が○または△を付けている。この結果を参照しながら、第一回目の意見交換が、候補者五十音順に行われた。

イトウは「移動する密室」のアイデアが光る。

今回初めて最終選考に残ったイトウワカナは、北海道の演劇ユニット「intro」で活躍し、すでに数々の演劇賞に輝いている実力者。2019年に関西に移住したため「関西在住、または関西を主な活躍の場とする」という、OMS戯曲賞の規約に該当する作家となった。『砂利はポルカで踊る』は、大阪の劇団「万博設計」で、2020年11月に上演が実現。田舎町の最終バスに、15年間も町を離れていた元歌手・サチコと、その妹・マミがたまたま乗り合わせたのをきっかけに、姉妹のスリリングな関係や、サチコが帰郷した事情、かつて大きな災害に見舞われたこの町の状況などが、他の乗客や運転手も巻き込んだ会話を通じて、走行中のバスの中で明らかにされていく。

本作に関しては「バスの中で話が展開するというのが、密室っぽい緊張感があってドキドキした」(佃)「バスだから常に移動しているわけだけど、でもそこは密室だという。この『密室が移動する』という不思議なアイデアは、演劇としてすごく面白い」(鈴木)と、この特異なシチュエーションへの賞賛が集まった。

また佐藤からは「会話はわりと書けていて、力量がある」という言葉が。樋口も「全体的にちょうどいい。ちょうどいいぐらいにハラハラして、ちょうどいいぐらいに感情移入できる」と、バランスの良さを評価した。

その一方で「登場人物が増えると、より緊張感が増していく方がいいけど、（乗客の）江藤さんが乗ってきてから、逆に緊張感が薄れた。それがもったいなかったし、サチコの人間性がいまいちつかめなかった」（佃）「サチコにどういう事情があったのかが、一つのドラマの核だけど、どうもサチコに肩入れできない。マミの方が理解できる」（土田）と、人物の造形……特に主人公的な存在の、サチコの描き方を問題視する声上がる。

それに対して樋口は「サチコが15年間何に踏ん張ってきたか？ が見えないことが、人間性をわからなくさせているのでは。サチコは都会で、何らかの見返りを要求され続けた15年間が、絶対あったはず。そこに運転手と江藤さんという、見返りを要求せずに幸子を助けてくれる人たちが出てきた。彼女の15年間を超えるような何かが、この関係性から一瞬でも見えたらよかったと思う」と、その原因を分析した。

また佐藤からは「表層的な会話はよく書けているけど、一人ひとりの感情がよくわからない。人間の見つけ方がすごく適当というか、役割を与えただけに見える。どの人物もそこから逸脱することなく、始めから終わりまでほとんど変化しないから、物語の展開だけで見せてしまうことになったのが残念」という言葉が。土田からも「他人同士が会話をするための工夫が、もう少しあった方がいい。走っているバスの中でもっと何かを起こして、終点に着くまでにいろんなことがわかってくる……などの仕掛けがあれば、さらに面白くなったと思う」という意見があった。

久野の音楽劇は「本物」と思えない人に刺さる。

『パノラマビールの夜』で、第5回の佳作を受賞した久野那美。六年ぶりに最終候補に選ばれた作品は、自らのユニット「蝸の階」で2020年2月に上演した『行き止まりの遁走曲（フーガ）』。「今日で公園の役割を終える」と言われる海辺の公園を舞台に、公園を管理する男や公園内の灯台を守る男、クロージングフェスに招かれた有名ミュージシャンの偽物などが、それぞれのこだわりを語っていく群像芝居だ。

佃が開口一番「へんてこな芝居。でもこの感じが、僕は結構好き」と言ったように、その語り口は非常にユニーク。佐藤は「戯曲は（作家が）言葉を書けば、それが『世界』になるという面白さがあるけど、その唯一感がある。自分の言葉によって、世界がワーンと立ち上がってくる楽しさ、戯曲を書くことの初々しさをすごく感じる」と、その独特さの理由を評した。

また、劇の中盤では「本物と偽物の違いは何か？」ということや、「本物」になれない人間の苦悩について語られる部分があるが、その内容について特に話題が集中。「『本物なんてないし、なくてもいいじゃないか』みたいなことを言ってるけど、僕も自分以外の劇作家はみんな本物に見えて、自分だけがズルをして偽物であることをごまかしているという思いがある。そこは非常に心に残った」（土田）「本物になりたくてもなれないと思ひ悩む人たちに、すごく刺さる本だと思う。自分の心の中ではすごくいいものなのに、外に出した途端『これは違う』と感じてしまうことも、表現者にはよくあることだなあと」（樋口）などの声が寄せられた。

しかしその一方で「言葉だけで世界を作った時に、その世界を根底から壊すものを仕込むとしたら、それはちゃんと必然性があるものじゃないといけない。ラストで灯台が（公園から）離れることに、何の必然性も感じなかったし、そこまでやってきたことが全部嘘になると思った。『本物／偽物』ということについて、これだけ自由にいろんな言葉を発展させたのに、理屈で回収してしまったために失速したのが残念。たとえわけのわからないものでもいいから、何か決定的な言葉がほしかった」（佐藤）「偽物か本物か？ という二極のまま（物語が）行ってしまうのがもったいない。出発点では、何かとらえきれない広いものを表現しようとしたのに、外に出してみたら、人間の尺度を超えない、すごく二極の世界になってしまっている。それはこの本が、本当に言わんとしてることだろうか？」（樋口）などの評が上がった。

また土田の「最終的に（ラストに出てくる）歌の歌詞で、露骨に書きたいことを最後にまとめちゃった感じがして、そこに迫力が足りなかった」という発言を受けて、鈴木から「悪い言い方をしちゃうと、最後の曲に向かうための壮大なプロモーションビデオ。実は音楽が主人公じゃないかと思うけど、それがどういう旋律だったのかで、同じ言葉でも裏の意味が変わってくるはず。譜面を付けてほしいと思いました」という意見が。さらに続けて「いつかこういう、音楽が非常

に重要な本が出てくると思っていた。たとえば『レ・ミゼラブル』の戯曲を、あの旋律なしで、戯曲賞として審査できるのか？ とか。音楽劇を『戯曲』として審査する難しさを感じました」と、今後の課題となるような言葉も出てきた。

30人以上の人物を書き分けたくるみざわの手腕。

『ひなの砦』で第22回佳作、『同郷同年』で第25回大賞を受賞した実績を持つくるみざわしん。今回候補となった『白地に赤く、日の丸とカッポウ着』は「大阪劇団協議会」の合同公演として、2020年3月の公演に向けて稽古が進められていたものの、新型コロナウイルスの状況悪化にともない、あえなく中止となった作品だ。太平洋戦争直前の時代、戦地に向かう兵士たちをもてなすために、大阪の主婦たちが立ち上げた「国防婦人会」。その発起人の橋本ふみと、彼女を全面的に支える夫・忠吉を中心に、組織の始まりから「愛国婦人会」との対立、マスコミや軍部の思惑も絡んで、全国的な組織になっていく様と、それがもたらした悲劇的な結末を、ユーモラスなやり取りを交えながら描き出した力作だ。

特に賞賛されたのは、30人以上におよぶ登場人物の書き分けが、しっかりなされていることと、大阪大空襲の最中にも関わらず、おかしみを感じるラストシーン。「おびただしい人数が出ているにも関わらず『これ、誰だっけ？』みたいなことがなく読めたのは、かなりすごい。ラストの空襲で、ふみさんが『考えたいから、爆弾を落とすのやめて』と言うのが、すごく僕の中では腑に落ちた」（佃）「最初にキャスト表を見た時は『誰が誰だか覚えられないよ』とうんざりしたけど、読み始めたら覚えられていた。大人数を出す必要がある、しかもそれが生き生きとしてる芝居は、なかなか書けないのでは。コントとシリアスの割合がすごく良くて、特にいろんな意味でラストが大好き。軽やかに観客にも考えてもらうことをうながすが、私としては美しい」（鈴木）などの声が上がった。

また土田からは「戦争に入っていく過程を、二つの婦人会の対立を通じて描くという設定に感嘆した。東京と大阪、男と女、そして日本と中国というような、いろんな対立構造を書こうとしているけど、二つの婦人会のもう少し生なやり取りや、ふみさんの内面を通して、最後の戦争に光が当たるような描き方をしたら、もっとすごみが出た。どうしても、史実をちょっと外側からなぞった気がする」との指摘が。

続いて樋口も「その時の日本の全体の流れがすごくよくわかるけど、全体像しかとらえきれないなあと。演劇はその全体の中から、一人の人間を浮かび上がらせるのが可能。そういう意味では、ふみさんは何を思っておもてなしがしたいと思ったのか？ なぜ大阪の人（が発起人）だったのか？ など、人物を浮かび上がらせてほしい。あの時代の全体構造の説明ではなく、（戯曲文末の）参考資料の向こう側に、作家が何を見て、何を感じたのかを読みたかった」と述べた。

この資料の参照に対しては、佐藤から「史実の読み込みが少なすぎる」との苦言が。「なぜ資料を読むか」というと、演劇は人を書かないといけないから。当事者たちが毎日何を聞いて、何を見ていたのかを感じる事がすごく重要だけど、そういうリアリティがこの作品にはちょっとない。憲兵がふみに斬りかかろうとするシーンがあるけど、ああいう場面にリアリティのないことが、その他の現実感を裏切ってしまった感じがする。夫婦関係を中心に描くのは、すごくいい着想だと思ったけど、（参考資料から）使いやすいものを出してまとめたという趣向に思えて、そこにすごく疑問を感じる。くるみざわさんぐらい力のある作家なら、この五倍は資料を読んでほしかった」と、力を込めて評した。

「この時代」をテーマにした高橋の優れた直感。

OMS戯曲賞の常連作家で、第22回では『誰故草（たれゆえそう）』で大賞を受賞している高橋恵。2020年2月に、自らの劇団「虚空旅団」で上演した『ダライコ挽歌』は、高橋が生まれ育った大阪の町工場をモデルにした群像会話劇だ。バブル景気直前の1983年から、銀行や保険会社などの破たんが相次いだ1999年まで、この町工場の状況や、そこに出入りする人たちの人間模様を、当時の世相を巧みに反映しながら描き出していく。

手練の作家だけあり、選考委員たちからは「非常に読みやすく、一人ひとりに感情移入でき

る。僕はコロナの時、暗い結末がすべて嫌になって、うわっ面でもいいからハッピーエンドにしてくれと思っていたので、そういう意味では共感できました」（土田）「時代や街が移り変わっても、人は何を頼りに生きるのか？ という時に『端的に言うとお金かな、いやでも結局人間』という、この言葉にすべてが込められている」（樋口）などの評価が。その一方で「こういうお芝居は、人の出入りがどれだけ巧妙に描かれるかが大事だと思うけど、後半に入ってから、それが少し雑になったのが気になった」（土田）「時代の経過を表現するために、作業日誌を読み上げていたけど、高橋さんほどのクオリティがあれば、作家のオリジナリティで、もっと違うことができたのでは？」（樋口）という意見もあった。

また鈴木「人物がすごくチャーミングで、とてもすんなり読めたけど、なんで1999年で終わるのか？ なぜ今そこ（の時代）を描くのが、今一つわからなかった。無理からでも、現代につながっていくのなら、まだ理解ができるんですが……」という疑問を受けて、佐藤「実はこのドラマが終わった2000年あたりから現在まで、根本的な世界の変化って、何も起こってないんです。イデオロギーの時代からお金しかない時代になって、それが今に至っていることが、コロナでちょっと見えてきたけど、それと『お金ではない、人なんだ』という言葉が重なっていて、ビックリしました。歴史的な事件を入れなくても、本当にこの時代をよく書いているし、（お金しかない）時代にあらがっている人たちに、ちゃんと焦点を当てている。それを作家が意図してのことだったら相当深いし、劇作家の直感って捨てたもんじゃないと思いました」と、この時代を描いた狙いを分析してみせた。

その一方で、佃から「僕はちょうどこのぐらいの時代に、アルバイトで[ナガオカ]というレコード針の会社に勤めていたけど、ちょうどCDが出回りだして、あっという間にレコード針が廃れていって。そこで一緒に仕事をしていた人たちが次々に辞めていき、ポコポコっと穴が空いていく実感がありました。この戯曲でも、社員が辞めて抜けていくじゃないですか？ それなのに、ぽっかりと穴が空く感じが、あんまりしないのが惜しいと思いました」と、自らの体験と重ねて、そのウィークポイントを指摘する場面もあった。

田辺の劇構造は演劇の舞台性の何かに触れた。

『旅行者』で第14回の佳作を受賞している「下鴨車窓」の田辺剛（ちなみにこの年の大賞は、史上初の『該当なし』だった）。不条理な設定の戯曲を得意とする作家だが、愛知県の児童向け芝居の劇団「劇団うりんこ」に書き下ろし、2020年8月に上演された本作も、かなり驚かされる設定だ。祖父が自宅の庭に作った、コンテナ状の小屋に引きもる少年・ユウキが、ある日友人と遊んでいると、その小屋が突然動き出す。小屋ごと無人島や戦場などをめぐっていくユウキの物語と、その小屋を動かすバイトに応募して、過酷な労働を強いられるレナの物語が、同時進行で進められる。

本作に関しては、選考委員全員が口をそろえて「この劇構造のアイデアはすごい」と絶賛。「普通なら隠れている（舞台）転換の裏方たちに、登場人物として役割を与えて、それを物語に組み込んだのは、非常に卓越した思いつき。すごく体感的なものがあり、演劇の舞台性の何かに触れている感じがする」（佐藤）「設定は全作品の中で、一番興奮した。『ああ、演劇だなあ』と思った」（土田）「中学・高校生向けの作品とのことだけど、実際に上演を観たらすごく刺激的な、驚きの演劇体験ができたのでは」（樋口）などの声が上がった。

しかし内容に関しては、鈴木「これを読んだ後、自分の世界がこの戯曲の世界のように見えてしまうという魔力がある。ものすごく癖になる本だけど、作家が何を信じて、何を書いているのかというのは、さっぱりわからない」という言葉を皮切りに「非常にわかりやすく、わからない状況を説明している感じが僕は好きだけど、部屋が移動して行き着く先が、なぜ無人島や戦場じゃないといけなかったんだろう？」（佃）「行く先々で起こる出来事が全部ステレオタイプだし、解決しないといけないくさんの問題が、全部放置されている。一番の問題は、ユウキが部屋にこもってる理由がはっきりしないこと」（佐藤）「無人島とか戦場という設定が陳腐だし、そこで陳腐な体験をして変化をするのは都合が良すぎる。せめてレナのいる床下の世界を、日常の単語が出てこないような、もっと突拍子もない所にした方がよかった」（土田）などの手厳し

い意見が。

また樋口からは「ユウキは部屋を出る、レナはブラックバイトを辞めるという、はっきりした着地点がある。その結論に至るまでに、彼らは（劇中で）何か新しい思考回路を得たはずだけど、それはどんな思考回路か？ということが、実は描かれていない。登場人物たちが何を思い、何を考え、労働についてどんなシノブシスを作り出したかということが、戯曲として足りないのでは」と、具体的な改善点が。佃からも「ユウキとレナの話がリンクするのが、ちょっと後ろすぎる。二人がもっと早くお互いの存在に気づけたら、もっと主体的に動けたと思うし、ラストの着地点にもすんなり行けたのでは」と補足があった。

今までにないリズムと痛みがある山村の会話劇。

大阪芸術大学で舞台芸術を学んでいる学生で、今回の最終候補作家の中では最年少となる山村菜月。OMS戯曲賞初挑戦となった『その桃は血の味がする』は、戯曲賞応募のために書き下ろした作品だ。就職活動中の大学生・円花と、円花の姉であり、現在は引きこもりとなっている愛美の二人を中心に、家族の不思議さや不条理さについて問いかける物語を、非常に生き生きとした関西弁の会話で繰り広げていく。

この作品については「すごく会話が面白い。会話ってこういう風に展開するんだという意味では書き抜かれている」（佐藤）「とにかく会話のセンスがいい。はっきりした感情になる前の、気持ちの揺れ動きみたいなものを、わりとそのまま書いていて、すごく実直に自分の見た世界を描いていると思う」（土田）と、会話の書き方への賞賛があいついだ一方で、名古屋人の佃からは「大阪の人って、こんなにしゃべり倒すの？（一同笑）ずっと二人でしゃべってるシーンだけが続いて、しかも内容が一義的だから、読んでいてちょっとしんどかった」という意見も。

また鈴木は「今までにない、新しい戯曲を読んだなあ。新しい世代の言葉、話し方、リズム、そして傷つき方で、とても楽しい体験でした。表層の会話のバランスも、非常にリアル」と評したのに付け加えて「私が大学生の頃、一緒にやった作家の飯島（早苗）が、先輩の劇評家に『（会話の）』とか“の使い方が新しい』とかほめられたけど、私たちはそれをまったく意識してなかったから『へー、そんな所を評価されるんだ……どうでもよくね？』と、非常に上からな態度で受け止めたんです（笑）。多分山村さんも、私たちが『ここが素敵！』と思ってることに對して『どうでもよくない？』と考えるんじゃないかと思います」と、自らの経験をもとに予測した。

樋口は本作の内容に触れて「鮮烈であざやかで、すがすがしい痛みが描かれている。私はこれを、それぞれの登場人物が脳内に作った桃源郷＝『自分を呪縛するもの』から決別する話だと読みました。円花は生身のお姉ちゃん（愛美）というより『姉がいるから、自分は自由にはいけない』と、脳内で作り上げた姉の存在によって自分を縛り付けていて、しかも『（姉がいるから）家に帰らないといけない』と、都合よく言い訳に使ったりしている。最後は円花が家を出ていく決意をする所で終わるけど、それは脳内の姉の呪縛からの決別であり、ここからいろんなことが始まっていくのが想像できた」と評価する一方で「一読した時は『◎を付けようか？』と思ったけど、二回、三回読んでいくと、少しずつ自分の中で薄まってしまったので、○にした」と述べた。

さらに土田からは「愛美もちょっとは変わってもらわないと、常識人の視点で読むと腹が立ったままで終わってしまう。愛美にも『そりゃ家から出られないよ』という理由がある上で、円花が一人暮らしをすると決めることが、この劇の肝だと思う。一応イジメの問題があったことが、言葉では出てくるけど、わりとスッと終わってしまっ、それが物足りない」との指摘があった。

また佐藤からは「AIが戯曲を書くと、多分こういう戯曲になるだろう」という言葉が。「話もわかるし、面白いけど『それがどうした』と思ってしまう。それはなぜかという、とらえどころのない、何かフックになるようなものがなさ過ぎるから。人間の心にはいびつな部分があり、それが（会話に）入ることで『一体何なんだ？』『それでどうなるんだ？』という感触が残る。AIが戯曲を書く際に問題になるのは、この『心』をどうするか？ということ。この作品は、大変上手く書かれているがために、全部が読み取れる気がして『それがどうした』感が残ってしまうことになる」と課題を示した。

山本は短い会話からあざやかに風景を見せる。

第20回の大賞受賞作家・中村ケンシが主宰する「空の驛舎（えき）」での俳優活動と並行して、作家活動も行っている山本彩。OMS戯曲賞初応募で、自身にとって三本目の長編となった『花を摘む人』は、郷里・高知県の団体「ショープロジェクト」での上演が予定されていたが、コロナ禍のために企画段階で立ち消えになってしまっている。高知県のダム湖を舞台に、湖の近くにある村や、あるいは水底に沈んだ村にまつわる四つの物語が、ヒマワリや昼顔などの花をモチーフにしながら描かれていく。

本作に関しては「いろんな破たんはあるし、作家の手付きが見えてしまう所もあるけど、描こうとしている世界の開け方が面白い。さっきのフックの話で言う『こういうことが起こると、人の心にはどういふ波動が起こるか』という、その事態の見つめ方がキチンとできているし、やっぱり花の扱いが非常に上手くいっている。ある種の実験的手法に挑む姿勢も一貫しているし、今回読んだ中で一番共感できる作品」（佐藤）「会話から先にちゃんと世界が広がって、どの場面もイメージが鮮烈に浮かんでくる。しかもこの、わりと短い台詞のやり取りだけで成立させているのが素晴らしい。◎にしてもいいぐらい」（佃）「本当に台詞が短い。しかもシーンがべらぼうに長いわけでもなく、登場人物も変わっていくのに、会話の奥の背景がすごく立ち上がってくる。特に三場は、作者が確実にこの景色を見て、嘘なく書いているという気がして、非常に感嘆した」（土田）と、次々に高評価の声が上がる。

樋口からは「色がよく見える」という言葉が。「三場の終わりの『水位が上がってくる』というト書きを見た時、私は水ではなく血の色をイメージした。読みながらすごく色がわかる本で、しかも読めば読むほど面白い。私も案外◎に近い評価」という賛辞に加え「ダムに生活を奪われた人もいれば、逆に利益を得る人もいる。人間は傷つけも傷つけられもする、すごく両極なものを持っているけど、自分もそのうちの一人だという自覚を持っているから、登場人物たちを愛しく思えるのかと。ダムの村、もしくは日本各地の過疎化した村の問題が、いろんな所にあるんだ……ということが、彼らを入口にして見えてくるという、世界の広がりを感じ、ダムのコンクリートを貫いて咲く昼顔の描写も、人間はしぶとく、あきらめずに未来を見るという、未来の希望みたいなものが感じられて、じんわりと残る作品」と、熱心に本作の魅力を語った。

その一方で鈴木は「描かれているイメージや会話は美しい」と認めつつも「物語として筋は通ってるけど、出てくるヒマワリや昼顔が現物として現れた時に、それが芝居として成立するのか？ 絵として筋が通らないんじゃないか？ という気がする。悪いわけじゃないけれど『ああ、まったく上演してないんだな』という感じを受けました。何かがつとも机上のもの、文章上だけのものという気がする」という違和感を、率直に述べた。

以上で、七作品すべての意見が出そろった。ここで休憩をはさんだ後、15時15分から、大賞を決めるための二回目の投票が行われた。その結果は次の通り。

	窪	栗	佃	土田	樋
イトウ					
久野					
くみ	○				
高橋					
田丸					
山本					
山本	○		○	○	○

『白地に……』のふみさんは『人形の家』のノラ？

鈴木がくるみざわに入れた以外は、全員が山本に投票。「これはもう決定じゃないか？」という声が、誰からともなく上がったが、まずは鈴木の見解を聞こうという流れとなった。

鈴木は「この状況をひっくり返せるとは思いませんが……」と苦笑した上で「この作品のふみさんは、『人形の家』のノラだ」という、新しい見解を披露。「ノラもふみさんも、夫や周囲か

らすごく愛された、愛がいっぱいの人。それゆえに自分が本当に真心からやってあげたことは、悪いことじゃないと思っている。でも社会から『それじゃダメなんだよ』と言われた時に、ノラは『私はあなたの人形だった』という結論に達するけど、ふみさんは空襲の中で『考えさせて』と言う。そんな風に、愛されて育ち、思った通りに（周囲の人に）やって差し上げた人が傷ついていくという話が、私はとてもチャーミングだと思う。第二次世界大戦中の人々をあつかった話はたくさんあるけど、『愛がいっぱいだから、こんなことになった』という話は新しいし、面白いと思う」と、戦争ものの主人公としては、異色のキャラクター作りに成功している点を、改めて強調。佐藤が思わず発した「最初にその発言があったら、ちょっと空気が変わったかも」との言葉に、その場にいた全員から笑いが起こった。

その所見を受けて、各選考委員からは、以下のような意見が出てきた。「ふみさんは確かにチャーミングだけど『自分もこんな風に、加害者側になってしまうかもしれない。それに気づかないと、この悲劇は繰り返されてしまう』とは思えない。それを感じさせるためには、もっと個人を見せないと。大変な時代の中で、何かのより所を信じたいというのは、人間みんな持っている気がするけど、まずふみが何をより所にして、国防婦人会を作ろうと思ったのか。そして『考えたい』と言った時、何を考えようとしていたのかを、きちんと見せてほしい。戦争について、みんな絶対考えたいと思うけど、でも何を考えれば？ と思考停止してしまう。停止した時に、その先の回路を見つけるのが、作家の役割ではないか。また、使われている大阪弁が時代や背景に上手く乗っていないのも気になる」（樋口）

「たとえばSNSで何かを書いたら、マスコミなどにワッと持ち上げられてしまって、だんだんそれが制度に取り入れられてしまうという構図は、ある種の普遍性であり、今でもあり得ること。そうであるならば、やっぱりこの時代のことをちゃんと読み込んで、リアリティを与えてもらわないと困るわけで。当時の大阪の言葉や雰囲気を、もっと押さえておく必要があった。もう一步踏み込めば、面白い資料がたくさんあるのに」（佐藤）

「ジョン、マケ、ナンという、三人の浮浪者みたいな人が、いろんなシーンで時代背景を語ったりするけど、この人たちに……特にラストシーンに登場するナンに背負わそうとしているものが、よくわからない」（佃）

「その三人に関して引っかけたのは、最初の方で『満州事変は軍部のでっち上げということを、この（登場人物の）人たちは知らない』と繰り返していたことに、どんな意味があるんだろう？ と。これによってみんなが戦争をしたい気分になり、国防婦人会と愛国婦人会の争いに突入するきっかけになったというので書いたんだろうけど、そのリンクがよく見えなかった。『お前らがそんなんだから、こうなるんだぞ』という感じの、作品の外側にいる、皮肉な存在のようにしか思えない」（土田）

さらに佐藤は、戯曲に添えられた公演のチラシに記されている「今、再びこの道を許さじ！」という言葉を受けて「こういう形の演劇として上演するつもりだったのなら、すごく問題があるのでは。さっきの満州事変なんか、その時代の人たちの日記などを見ると、みんな（真相を）知っていたと思うけど、誰もそれを口には出さなかった。当時はみんなそっち（開戦）に傾いていたように見えるけど、それがいかに嘘だったかということをやらないと、今の状況が怖いということが言えなくなってしまう。劇作家があつかう歴史は、その部分だと思う。ただ、さっき裕美さんが言ったような部分まで踏み込んだ視点で演出をすれば、面白い芝居になるかもしれない」と、その危うさを指摘する言葉を重ねた。

ここで、創設時から戯曲賞の世話人を務めている、司会の小堀純からの「大阪はすごく『日本維新の会』が人気だけど、維新の会の人気と国防婦人会が重なる」という指摘に、その場にいた全員が「そういうことか！」というような声を上げる。さらに小堀は「愛国婦人会は天皇を中心とした国体であり、思想的な背景があるけど、国防婦人会は『私らが、がんばらなあかんねん！』という『気分』の組織。思想ではなく気分という意識を、維新の会はすごく利用している。大阪がそういう状況下にあるから、合同公演の戯曲の依頼があった時に、このことについて書こうと思ったのでは」と、作家の心境を推しはかる言葉を重ねた。

予想通り？ この状況をひっくり返すことはできなかった鈴木だが「多分ふみに対して『彼女

は私だ』と思う話ではないと思う。真心から一生懸命やってる人が、こういう目に遭うわけだから、じゃあ真心だけじゃダメだぜというか、ちゃんと考えないとダメだという風に、この話を見ることはできると思う」と、改めて自分の見解を述べた上で「(くるみざわさんは)今の大阪の情勢に、筆が焦ったのかもしれないですね。『早く言わないと大変なことになっちゃうから、ちよっと生煮えでも出しちゃおう』って」と、納得した様子を見せた。

山本作品は未上演ゆえにスンとしてる？

続いて議論は、山本彩に大賞を与えるか否かの話題に移った。

鈴木は山本の作品に対して「面白いと思うけど、あまり『お伝えしたい』感を感じない。私は個人的に『この思いつきを、皆さんにもものすごくお伝えしたい』と感じる作品に甘いので。くるみざわさんにはそれがあるけど、山本さんには感じない。とても内省してるというか……モテてる女という感じ」との発言にすかさず、土田が「ちょっとそれはわからない」とつつこんで、会場は笑いの渦に。

この「山本はモテてる女」発言が意味する所について、鈴木は「モテてる男でもいいんだけど(笑)『どうですか？ 見てもらいたいんです、聞いてもらいたいんです、僕の／私の話』という感じで口説きに来るものに私は弱いし、かわいくて素敵だと思う。たとえば久野さんや田辺さんの作品は、すごく口説きに来ていて好感が持てるけど、逆に山本さんの作品は『ここにいる私は魅力があるから、あなたたちから来ればよくない?』って印象」と説明。それを受けて土田が「モテてるとは思わない。モテてもモテなくてもいいから、自分の見たものをやる! ということでは?」と尋ねると、鈴木は「あ、そうそう。『モテるんです』は言い過ぎかも。でもやっぱり『私はここにいますので』って感じはしますね。(愛想のよい口調で)『ハイ!』とは言ってくれなさそう(笑)」と、終始ユニークな表現で、山本作品の欠落部分を語った。

他の選考委員は、山本を大賞に推す理由の補足として、以下のように語った。

「この作品の話と全然ズレるけど、僕はダムの話にちょっと弱い。以前ワークショップに行った劇場の裏にダム湖があって、線路がそのまま水の中に沈んでるのが見えて。その時に、きっとこの劇場はこの(ダムができた)おかげで、国からお金をもらって建てたに違いないと思って、いたたまれなくなった。それ以来『水の底に町がある』という設定に、弱い所がある……ただそれだけです(笑)」(佃)

「普通なら、佃さんが言ったような情緒で書いてしまうと思うけど、そうじゃないのが山本さんのすごい所。沈んで悲しいだろう? みたいな話では、全然ない。それと、四話とも話があまり似ていないんですよ。このバランスでは、なかなか書けないのでは」(土田)

「二場に登場する(村出身の)妹は、Iターンの人たちを『不自然』と言って嫌悪感をあらわにするけど、それは同時に、都会に出て都会人のフリをする自分の『不自然』さにも、ベクトルが向いている。だから『自然って何だろう?』という……ダムがあることは自然なの? 不自然なの? そもそも自然って何? と、何かをしゃべった時に、その裏側が常にある。片側だけでなく、いい所も醜い所も、両方やろうとしているのがいいと思う」(樋口)

また樋口は、鈴木が本作に対して「スンとしてる」という印象を持つことに対して「未上演であることが、何か関わっているのでは」と推理。「もし上演があったなら、稽古をするうちに『あれ? この言葉変えようか』という微調整が入って、柔らかいものになっていったかもしれない。『イメージが先行している』という感じがするのは、そのためでは」と樋口が述べると、鈴木は「だからちょっと、閉じてる気がするのかな? 『私はもう、これで終わってるんで』みたいなニュアンスを感じちゃうのは、そこかもしれない、確かに」と応じた。

ここで全員、山本の大賞授賞に異論がないということを確認して、16時10分に「第28回OMS戯曲賞」の大賞が『花を摘む人』に決定した。それは同時に、この戯曲賞始まって以来、未上演作品が初受賞するという、重大な瞬間を迎えたことにもなった。

大賞受賞作家の佳作受賞はありかなしか。

続いては佳作の投票。その前に小休憩が取られたが、そこで土田から「佳作は単純に、大賞の

次に良かった作品でいいのか。それとも”佳作“という賞の意義を、少し考えた方がいいのか。たとえば今まで大賞を取られた方がいるけど、そこは全然考えずに選んでいいものか」という問いかけがあった。

それを受けて、戯曲賞創設当初から選考委員を務める佐藤は「『今年はこの人が佳作だ』と思う人に入れたらいい」とサラリ。だがそこに鈴木が「新しい人を応援するという意義があるんですかね？（新人を対象にした読売演劇大賞の）『杉村春子賞』のように、新しい人にあげた方がいいのか」とたたみ掛ける。

投票直前、小堀が再確認のように「作品の水準、クオリティを大事にして入れてほしい」という呼びかけをして、出てきた結果は左の表の通り。

	高橋	伊藤	山本	山村	鈴木
伊藤	○				
高橋					
山本			○		
山村				○	
鈴木					
山村		○			○
山本					

山村に二票が投じられた以外は、見事に全員がバラバラ。もっとも意外なのは、あれだけくるみざわを熱心に推していた鈴木が、佳作では山村に票を入れたことだ。その鈴木の「こうなると思っていた（笑）」という、全選考委員の心の声を代弁したかのような第一声から、意見交換が始まった。まずはそれぞれ、以下のように投票理由を述べた。

「くるみざわさんは、この登場人物の書き分けの技術と、二つの婦人会の対立構造で話を持っていった所を評価した。高橋さんと、ちょっと迷ったけど」（佃）

「僕が高橋さんを選んだのは、特別な理由があるというより、本当に水準高く書けていたから」（土田）

「くるみざわさんは、もうちょっと書けて大賞という気がする。山村さんの方が、ビギナーズラック的かもしれないけど、ある一つの美を信じて書き切っていると思う」（鈴木）

「実は今回は、（授賞するなら）山村さんと山本さんの二人しかいないと思っていた」（樋口）

「僕は（第一回目の投票は）高橋さんに入れたけど、やっぱり（過去に）大賞を取っているの、もう一回狙ってほしい。くるみざわさんも、同じ理由で外して。そうなった時に、イトウさんと山村さんで甲乙つけがたい。山村さんのすごくリアルな所も評価するけど、イトウさんの方がいろいろ問題があっても、状況設定と台詞がちゃんと書けている点を評価できる。ただ山村さんが佳作でも、反対はしない」（佐藤）

ここで改めて、佳作の位置づけについて話し合う時間となった。まず樋口が「私は佳作って、これからどう成長するのか？と思う人に渡すべきものだと思う。みんな『賞が欲しい』というけど、賞をもらうことがどれだけ恐ろしいかということ、今経験しておかないと、それこそ成長しないAIになってしまうのでは。10年後、20年後にどうなるかという、私は”未来“に一票を入れたい」と言うと、鈴木は「大賞は、ある種の圧倒的さがどうしても欲しい。佳作は何かはまだだけど、美しいものを書き切っている感じがするもの、という気がする」と、自分なりの基準を打ち明けた。

それを聞いて土田は「僕はフラットに『次（にいいと思う作品）』ということで高橋さんを選んだけど、僕の中にも樋口さんがおっしゃったような思いはある。それで言うと、僕は山村さん。イトウさんは違う気がする。筆力がすごく上がってるので、もっともっとすごくなりそう」と言うと、樋口も「イトウさんは、もう一段階行けば、絶対大賞を取れる人」と、佳作の位置づけと

は微妙にズレるという思いを、確かめ合う形になった。

すると佃からも、以下のような発言が。「純粋な話の良さでくるみざわさんを選んだけど、だったら過去に大賞を取っているくるみざわさんと高橋さんは外そうかな。と考えたら、僕は久野さんがへんてこなので、とても気になるし……どうしたらいいですかね？（一同笑）」。

この佃のとまどいの言葉をきっかけに、再度投票が行われた。

	第1票	第2票	第3票	第4票
イトウ	○			
久野				
小堀			○	
高橋				○
田見				
山村		○		○
山本				

佳作の基準は作家ごとにバラバラでもいい。

この議論で結果が変わる人が出るかと思いきや、予想に反して、票は動かず。大賞が比較的すんなりと決定した分、佳作はすっかりこう着状態に入ってしまった。

そこで小堀から「OMS戯曲賞は、賞を取った人も含めて、何回でも応募できるのが一つの特徴で、たとえ選評会で厳しいことを言われても、同じように作品を出してくれる人が多い。それはやっぱり、この戯曲賞の選考委員がしっかり作品に向き合ってくれるからだし、自分の作品がどういう評価を得るのかを、しっかり聞きたいからだと思う。そのために作家は、その時書いたベストなものを出してくれているはず。選考委員の期間が長くなれば、一人の作家の作品をたくさん読むことになるから、当然過去の作品と比較して、今はどうか？ということが起こるのはわかる。でも自分としては、大賞を取った人が佳作になったっていいと思っています」と、長年この賞を見つめてきたからこそその提言があった。

それに対して佐藤は「（選考委員を務める）作家の個性が違う以上、一人ひとり基準は違うはず。だからこそ、佳作はかなり自由度を持った方がいいと、僕は思う。単純に一位と二位を選ぶのなら、最初から（二つ）投票して、その順番を付ければいいわけだから。大賞は『一番いい』と思った人が多いというのが当然だけど、佳作については評価が割れると思うので、それをどうするか？という議論までやっていると切りがない。それぞれで基準を作ればいいと思うし、その基準はあまりせばめない方がいい」と自分の考えを伝えると、樋口も「逆に『佳作はこういう設定です』と言われても、私はそれに添えない。自分で決めたものしか、やっぱり推せないの」と、きっぱりと告げた。

その時鈴木から、思わぬ発言が出た。「二つ目（の票）を入れると、どうなると思いますか？」。この意見に最初は「余計に混乱するのではないか？」などの言葉も出たが、先に入れた票と区別を付けるため、二票目は△にするという形で、五回目の投票に。しかしこの提案が、結果的に突破口となった。

	佐藤	久野	土田	鈴木	樋口
イトウ	○				
久野		△	△		
くるみ			○		
高橋				○	△
田辺					
山村	△	○		△	○
山本					

佃以外の選考委員が、少なくとも一票は山村に入れるという結果に。これが決定打となり、16時45分に、山村の佳作授賞が確定した。現在21歳ということで、『愛と悪魔』で第12回の佳作を受賞した司辻（かさつじ）有香の24歳から、最年少受賞記録を更新。また現役大学生での受賞も、史上初となった。

授賞式&公開選評会～驚きと感謝と喜びと。

同日の19時から行われた、授賞式と公開選評会。昨年は感染症対策で、候補者本人＋付添一名と報道関係者以外は、ライブ配信での参加を求められたが、今回は事前申込制で、一般の観客も来場が認められるようになった。

どちらも初応募で、しかも知名度があまり高くない二人の受賞が告げられると、会場は心なしか、とまどいと驚きが混ざったような空気に。しかしすぐに、新たな才能が発掘されたことに対する喜びと、祝福のムードに包まれた。

大賞に選ばれた山本彩は「人前に出るのが久しぶりで、緊張してすいません」と断った上で「大阪に出てきてからずっと憧れの賞だったので、すごく嬉しい。上演ができなかった作品なので、（選考委員に）読んでいただくだけでも本当に嬉しかったです。『このまま戯曲を書けるかなあ？』と悩んでいたけど、これからもがんばって書いていきたいと思います」と、ひかえめに挨拶した。また「たくさんの方に感謝の言葉を伝えたい」と言って、中村ケンシを始めとする空の驛舎の劇団員たち、本作を上演する予定だったショープロジェクト、そして家族への感謝を述べた。

その中には、彼女が戯曲の書き方を学んだ、伊丹市の公立劇場 [アイホール] の戯曲講座「伊丹想流私塾」の北村想塾長や、講師たちの名前も。ちょうど今、来年度以降の存続の問題で揺れているアイホールだが、過去の受賞者を振り返ってみると、この講座の出身者は少なくない。改めて、この劇場が成し遂げた功績を嘖みしめるとともに、劇場の継続を願わずにはいられなかった。

授賞式に話を戻そう。佳作を受賞した山村は「いろんな人に読んでもらえるだけでなく、ここまで（の結果）とは思っていなかったんで、すごくビックリしています。こんな所に来られるなんてと、頭が真っ白です」と、初々しく挨拶。そして「この作品は、家族とかそういう感じのことを書いてるんですが、私は家族からすごく愛されて育ちました。戯曲を書くことも認めてもらって、今こうしてこの場に立てていることが、すごくありがたいし、嬉しい。皆さん本当にありがとう、と言いたいと思います」と、ほがらかに締めくくった。

授賞式の後には、引き続き公開選評会へ。大賞の山本には選考委員全員、佳作の山村には鈴木&樋口からの選評が。そしてイトウは佐藤、久野は土田、くるみざわは鈴木、高橋は樋口、田辺は佃が選評を担当した。

それぞれの選評は、おおむね選考会で語られたことをピックアップした感じだが、唯一佃は田辺の選評の際「僕もうりんこに劇を書いているけど、うりんこの依頼の仕方からして、おそらく『中高生の鑑賞向けに、高校生の引きこもりの話を書いてください』と言われたと思う。そこで普通なら、引きこもってる子が部屋からどう踏み出すか／踏み出せないのかという話になる所を、

田辺さんは悩んだ末に『出てこないなら、部屋ごと引っ張って世界に連れ出そう』と考えたのでは。その乱暴な思いつきを、部屋を動かすことを専門とする労働者たちがいるという、ムチャクチャな設定をぶつけて押し切って、中高生に見せた……素晴らしいじゃないですか（一同笑）」と、選考会では出てこなかった推察を語った。

最後に選評会の司会の小堀から「OMS戯曲賞は、再来年には30回を迎えることになりましたが、この状況下で戯曲賞を続けていただいている、大阪ガスの関係者の皆様に、本当に感謝を申し上げます。関西はアイホール存続問題であったりとか、なかなか厳しい状況が続いてますが、この戯曲賞はやっぱり作品を書いて、上演している作家・演出家・俳優・スタッフ、そして観客の人たちがいて続いていけている。賞は一つの文化だけど、文化を形作るのは、そういった人々だと思う」と、一つの声明とも取れる言葉を。そして「来年も、未上演やオンラインの作品も候補対象になると思う。上演する機会はないけど、書いてみようという方。あるいは上演したけど、こんな状況でお客さんが全然入らなかったという方もいらっしゃる、ぜひ応募していただきたいと思います」と、まだ見ぬ才能に呼びかける形で、28回目の授賞式&公開選評会の幕を閉じた。

山本は違うやり方を目指し、山村は今のやり方を極める。

選評会終了後には、山本と山村の囲み取材が、自然発生的に行われた。ほとんどのメディアがノーマークだった二人だけに、生年月日や戯曲を書き始めたきっかけなど、これまでの囲み取材ではあまりなかった、作家のプロフィール的な質問があいつぐ。

選評会の感想を聞かれて、山本は「台詞が短いことや、各場面で色を変えていることをほめられたけど、そこはすごくがんばった所。言葉を削いで削いで、どこまでやれるか？をいつも意識しているので、それを見ていただけたことに感謝したい。また鈴木さんに『スンとした印象』と言われましたけど、自分でも『ああ、わかる！』と思いました（笑）」、山村は「すごく普通に、ほめられて嬉しい。高校生の時に『会話劇が上手いね』と言われて、調子に乗って今続けている感じなので、会話をほめられて良かったと思いました」と述べた。

「それぞれの作品を、どういう位置づけで書いたのか？」という質問に対して、山本は「五年ぐらい前に過疎の村をテーマに書いた時、ちょっと上手くいかなくて悔しかったので、似たようなテーマをぶつきたいと思いました。小さい頃祖母に、ああいうダム湖に連れて行ってもらった記憶があり、そこを想定しています」、山村は「普段は短編とか、場所が変わらない芝居ばかり書いていたので、桃源郷などいろいろリンクさせてがんばってみましたが、結果的にそんなにいつもと変わらなかったかも。作品のモデルというわけではないのですが、一時期私の兄が……ニートというほどじゃないけど、家にずっといたのが『嫌だなあ』と思ってて。不純ですね、すみません（笑）」とコメントした。

今後の抱負については、山本は「こだわって書いた所を評価してもらえて、すごく嬉しかったけど、自分が得意な形でいったので、がんばってまた違うやり方で書いてみたい。大阪では空の驛舎、高知ではショープロジェクトに上演してもらえたら」、山村は「私がやってることは間違っていない……という言い方は変ですけど、『あ、これでいいんだな』と思えたので、これからも自分なりにがんばろうと。上演していただくなら、演出はちょうど今教えていただいている、内藤（裕敬／南河内万歳一座）先生にお願いしたいです」と回答した。

「劇場が主催する賞だから」ということで、上演実績のある作品にこだわってきたOMS戯曲賞だが、大賞と佳作、そして大賞を争った作品が、いずれも未上演の作品だったというのは、一つ象徴的なことだった。あくまでもコロナ禍を考慮しての特別措置だったが、山村のように特定の上演団体を持たず、外部の執筆もまだ多くないフリーの劇作家には、まさに千載一遇のチャンスともいえる状況ではあっただろう。この結果はもしかしたら、OMS戯曲賞の一つの分岐点となるかもしれない。

そして今回の最終候補作を振り返ると、新型コロナウイルスが猛威を振るう以前に書かれた作品が大半だったこともあり、明らかにコロナ禍を反映したと思える作品は（筆者の主観ではあるが）ゼロだった。しかし第29回の応募対象となる2021年1月～12月は、たび重なる緊急事態宣言

やイベント自粛などで、誰もがコロナとどっぷり向き合わざるを得ない一年だったはずなので、その状況や心境がビビッドに描かれた作品の応募が、来年以降はグッと増えるのではないだろうか。

コロナ禍の前と後で、世界は目に見えて変化した。関西演劇界も、OMS戯曲賞も、必然的にその変化に巻き込まれるのだろう。しかしそれにおじけづくのではなく、むしろその現状をバネにして、ポジティブな方向へと力強く飛び出すような作品の応募があること。そしてそんな作品が、間違いなく賞に選ばれることを、心から期待したい。

(文中一部敬称略)